

津田昇平教話 第七五話

令和三年三月十六日 朝の教話

天が下の氏子の死んだ者の魂は、天地の間にふうと、ぶゆが飛ぶように遊んでいるので、どこへ行くものでもない。わが家の内の仏壇にいるし、わが墓所に体をうずめていることからすれば、墓所と仏壇とで遊んでいるのである。

おはようございます。令和三年三月十六日の朝をお迎えすることができました。昨日までは、御霊みたま様のこと、また生まれるということ、生きるということ、死ぬということ、お墓のこと、こういったことについてお話をさせて頂いたと思います。

天あめが下うじこの氏子の死んだ御霊みたまは、天地の間におけるのじや。どこへ行くものでもない。わが家の内の御霊舎みたまやにおけるのぞ。わが墓場へ体を埋うめておるから、墓場と御霊舎とで遊しずび鎮しずまっておるのじや。まつる所には、どこでも、そのまつりを受けける。

一理Ⅲ 御理解拾遺ごりかいしゅうい 三六より抜粹一

というふうにして仰っておられましたね。大事なところは、まつる所にはどこでも、どこであるうとしても、そのまつりを受ける、ということですね。天と地というものがあり、人間は天から御霊みたまを分けて頂き、地から肉体、人体を分けて頂いて、肉体、人体に分け御霊みたまを込めて頂いて、そして生きるということができわけですね。生命せいめいが誕生し、そして生きるということがある。死ぬということは肉体と分け御霊がほどける、引き分けになるということになって、分け御霊様はまた天てんに戻り、肉体は地に戻る。

で、天というのは遠く離れているというわけではなくて、それは私たちが目に見えるこの物質の世界ですね、主にそれは地ですけども、地と全部溶け合ってるものですから、だからどこに行っても、何を見ても、天と地が、本当は混ざり合ってるということですね。

ただ、私たちが触れることができたりとか、見えたり、聞けたりいうところというのは、これは地の部分です。でも、そこにも天の部分が実はすべて重なっている、込められている。溶け合っているということですね。

私が今こうしてお話してますけれども、話してる姿を見るのは、皆さん、私の地の部分を見てくださいけれど、でも、私の中に天があるわけです。

分け御霊様がある。この小天地こてんちもそうだし、この大天地だいてんちもそうです。全部が天あまでは繋がつながって、溶け合っているとということになります。

日本古来の御霊観みたまかん、たましい、先祖、こういったものに対して、教祖様がどのように捉とらえておられたか。どのようにご信心しんされてたか。どういふことを神様から教えられて、大事になさってたか。

それは、昨日は柳田國男やなほたくにおさんという、民俗学の礎いしほえを築いた方のお話も少し交えながら、ご説明、お話をさしてもらったと思います。その中で柳田さんが言っておられるのが、「日本では顕界けんかいの生者と幽界ゆうかいの死者と

の行き来が繁しげく」、顕界けんといふのは、「顕現けんげんする」の「顕あれる」という字

ですね。つまり、この世このよとあの世あのよです。この世の世界と幽界、幽界は、

幽世かみよって言うことですね。あの世の世界ということ。この世の世界と、あの世の世界って言うことですね。で、「この世に生きる生者、生きてゐる者と、あの世の世界、幽界に行っている死者との行き来、往来が繁あしひく、足繁あしひくということですね。往来が繁あしひく、どちらかが願かいさえすれば往来は叶かなうものと考えられてきた。

どちらかが願かいさえすれば、というところが大事ですね。私たちが、亡くなった人、生きてる私たちが亡くなった人に思いを寄せるように、亡なき者、亡なくなった人たちも私たちが亡なくなったことを、生きてる者たちのことを思っている。さらには亡なくなった人は、亡なくなる死きわに際きわですね。そのままにという今際いまわの時とき、その時にはこう、自分の念願ねんがんというものが、亡なく

なってから成就するのであるという。そのために自分が亡くなって幽世に行く、幽界に行く、あの世に行く。そうすることによって、そこからまた、生前願ってた、念願叶うように、念願が叶うように働き続け、計画を立て、遂行すいこうしていく。そのようにして、考えていたということですね。これを、何代にもわたって生きている者たちを支え続けていくというのが、亡くなった者のいわば役目であるというふうにして、考えられてきたわけです。

私が例えば和太かずた先生（尼崎教会初代）にお話をすれば、天ですから時空を超こえます。時間も空間もありません。天は宇宙の果てまで全部繋がっているでしょうねえ。地のある所には天がありますから、全て。たとえ何

億光年、光は一秒間に三十キロですかね。三十万キロでしたか。地球を七週半って俗に言いますけれど、そのスピードで光がある。それが一秒ですけれども、その一秒間で光が到達するところ、スタートから三十万キロ先に行く。これ、たった一秒ですけれど、それが二秒、三秒ってなると三秒間で到達する所といったら、そうすると九十万キロになるわけですね。これまだ数秒ですけど、これが一年、二年、十年、百年、千年、万年、億年となるわけですね。そうすると、果てしない距離があります。とてもじゃないですけど、そんなとこに地の部分について行けませんけれども、でも天は、そこにも常にあるわけですね。

じゃあ、光ですら何億光年、何億年もかからないと到達しない光のス

ピード。でも天はそこにあつたとしたら、あるわけですから、今私がそこに心を込めて、例えばそんな遠くの所によ、そこに居たとしても、誰かが、和太先生がでも、私の中では「和太先生」って言ったたら、時空を超えてますんで、天って言うのは。時間の制限もなければ空間の制限もありませんのんで、もうすべに到達するわけです。

声をあげて、声が届くってなってるじ、これ、光よりもっと遅いですからね。じゃ、物理の世界で言うたら、地の理じのりで言うたら、これは限界がある。ところが天の世界で、天の理で言うたら、そういう時空を超えますから、もうそれは、ここ今で私が話をして、目の前で聞いてらっしゃると同じようにして、宇宙の果ての所があるうとも、私が今こう話

ししたことは皆、宇宙の果てで通じるわけですよ。

これが天の理というところがあります。で、祈るということは天を通じて地に現れるということになってきますから、だから、天地の間のことってというのは、祈るということは、てんちかねのかみ天地金乃神様に祈るということは、祈りはこの天を全てしかな司る神様の所に伝わって、どこであろうともそれは地に現れてくる、影響していくということになるんですね。

で、私と御霊様の話で例えば考えたら、和太先生に私が話しかけたら、私は神様に心寄せてお話してると思ってる。でも、それだけじゃない。和太先生も私に話をしたいと思ったら、いつでも話をしようとする事ができる。こちらだけが思っていると思ったら大間違いで、いやひょっ

としたら、いやいやそれ以上に、御霊様の方が実はいっぱい話しかけてくたしょうがないんでしよう。

けれども人間が、生きてる人間がそれをどこまでキャッチできるのか。これはできないってことはないです。なぜならお互いに自分の中に天があるわけです。和太先生やったら和太先生も天にいらっしやる。私の中にも分け御霊様がある。皆さんの中にも天がある。だからそこでは繋がります。時空を超えていっつも会話ができる。でもそれを認識して、頭で理解して、聞くことができ、承知して分かる、認知するってことになってくると、これ、私たちが自分の中の天をしっかりと耳を傾けるかどうかによって全然違いますねえ。

私が、自分の中のたましいの声というものを意識してたら、和太先生が話をして下さった。それを私の分け御霊様が受け取った。その分け御霊様の声を、私がこの脳で、身体で、意識でキャッチできる。そしたらちゃんと聞こえてくるわけですね。これ、神様との対話でもそうなんです。でも、私が自分の分け御霊様の働きというものを意識しなければ、そこはもう繋がってないですから。たましいと肉体、意識との断絶たんぜつがそこにありますから、だから聞くことはできないでしょうね。だから亡くなっただ方というのは、死者というのは、ご先祖、御霊ですね、いわゆる。それその御霊の働きに訴うたえてくるわけです、皆さんの中に。皆さん、今聞いてらっしゃる方、皆、たましいがあるわけですよ。そこに訴えてく

る。じゃ本当は聞くことはできるんです。可能なんです。ただ、どれだけ自分自身の意識がちゃんど、そのたましいの声に、天から授けて頂いた最高のもの頂いてるわけですから、そこに意識をもってらっしゃるか、それによって違う。

死者が生きてるもんに対して、お話をするんは、二通りある。一つはそうして直接その人の分け御霊様に訴える。それをこちら側が常に意識したら聞こえてくる。声なき声で聞こえてくる。理解できる。受け止めることができる。これが一つの方法。もう一つはそれがなかなか難しいのが実際かもしれない。それはどれだけ自分自身の感覚が開かれてるかによって違ってきますからね。

で、そうでない場合はどうするかということ、夢の中に出てくる。夢というのは寢目いめってという言葉から端たんを発して、寝ている時の目。つまりたましいの目という言葉ですね。要するところね、寝ている時は理性が緩ゆるみますから、鎮しずまりますから、その間、たましいがずっと働いてるわけですよ。こちらは寝ても意識はなくても、でもたましいがずっと働いているから、だから心臓も動くし、呼吸もできる。そのたましいが活発になってるところに御霊様がお話をされてくる。訴えてくる。すると夢の中で、夢という形でもって認識するということができる。

で、例えの話として、昨日はたまの先生、三代先生が見た御夢みゆめの中で、和太先生が枕元にね、立たれて、そしてお装束しやうそくの姿で、御剣先おけんさきがお装束

にはあつとこう折り鶴のように付いていた。もうそれほど神々カミカミしかった
と言つことを仰つて、そこで目が覚めた。

それは、たまの先生にとつたらそれは一つの御霊様との交流であるわけですけれども、和太先生とのその対話、その声を受けて、これはたまの先生も訴えただろうし、それに対して、和太先生もきちんとお話をされている。どっちかというよりも両方なんでしょうね。そして、たまの先生はそこから、御夢を頂いてから、それから六十年以上経つんでしょうね、亡くなられるまで。ずっとそれが、大きな大きな支えになっていた。その言つて頂いたその言葉と言いますか、聞こえない言葉で映像ではあつたとしても。

こうして、天というのは死者の生きる場所なんですよ。御霊は生き通しですから。私たちが、生きてる者が生きる場所はこの地ですけれども、死者の生きる場所というのは天になります。で、私たちの中にも天がある。だからいつでも繋がりがやすい。繋がることができる。とりわけお広前ひろまえの御霊前ごれいぜんであるとか、墓とか、これは亡くなった人と生きてる者と待ち合わせの場所であり、約束の場所になります。

お墓であれば会うことができます。でも、お広前になってくるとこれは信仰が入ってきますね。ご先祖からごついで信心しておかげを頂いてくれ。うちの子孫も含めて、先祖も含めておかげを頂いてもらわんといかんから、だから信心したい。だから教徒にならして頂きたい。そういう願い

の中で、この御道の信心を、先祖も子孫も含めてしっかりと繋がってもらいたいというその願いがあつて、そして教徒になつてゐるわけですね。それを子孫の人たちが、どれだけ大事にされてるかどうかはちよつともう、めいめいになつてきますけれども。けれども、この御霊前の御扉おひらといふのは、あの世とこの世とを繋ぐ扉になるわけですよ。

そういう意味で、やはり春秋の靈祭であるとか、そういった時には足を運ぶ。そして、その約束の場、約束の地に自分の身を置いて、お話をさせて頂く。忘れておりませんということをしつかりと、それを、誓いを現していくということ、それが生きてゐる者と死んだ者と、死者と生者の、その約束になるわけですね。それがすごく大事になつてくる。それをし

ないと御霊は孤独になるっていうふうにしてね、柳田國男さんは仰って
ましたけれど。まあそれはそうですね。

ま、こういう話を昨日はさせて頂きました。教祖様のご理解、もう一
つ紹介させて頂きましょう。

ある方が金光様きんこうさまに対して、真宗しんしゅう、浄土真宗じょうどしんしゅうとかの、あの真宗しんしゅうですね。
真宗では死んだらどこどこに行くとかありますね。で、宗教がたくさん
あっていろんな教えがあるけれども、「死んだらどうなるんでしょうか」
とお伺いしたんですね。すると金光様は「そういうことはありはしない」
つまり、遠くに行くというわけではない、ということを仰ってるんです

ね。で、ここでもまた先ほどのみ教えに近いんですけれども、

天が下の氏子の死んだ者の魂は、天地の間にふうふうと、ぶゆが飛ぶように遊んでいるので、どこへ行くものでもない。わが家の内の仏壇ぶつだんにいるし、わが墓所に体をうずめていることからすれば、墓所と仏壇とで遊んでいるのである。

一理Ⅱ 佐藤光治郎 二八より抜粋

これ、先ほど、昨日も紹介したのとほぼ一緒ですね。まあ仏壇ぶつだんって言葉

が今出てましたけど、今日最初に話しをしたのは、昨日ね、紹介したのは、「わが家の内の御霊舎みたまやにおるのぞ」。教祖様は同じ言葉を使われたかもしれません。受け取る側の認識というのは、何もかもが全部、教祖様のね、一言一句を間違わずに理解して覚えてるわけではありませんので、聞く人の、まあ理解の中でこのようにして受け取ったんでしょう。「御霊舎」と仰ったか、「仏壇」と仰ったか、分かりません。まあ同じことですよわね。

「天地の間に、天あめが下の死んだ者の魂たまごは、天地の間にふうふうとぶゆが飛ぶように遊んでいるので、どこへ行くのでもない」と、そのように仰っておられますね。

つまり、ぶらぶらと、天と地の間に遊んでいる。ぶらぶらでもいらっしやる。「ぶらぶら行くものでもない」と書いてますね。面白いですね。ぶらぶら行くとか、行かんってというのは確かにね、地の理じりで話してるんです。

「あんたどこへ行くん」「え、ちょっとあの学校に行ってくるわ」「あんたどこへ行くん」「ちよっと東京の方に行くわ」「あんたどこへ行くん」と
「ちよっと海外旅行でアメリカに行ってくるわ」「あんたどこへ行くん」「ちよっと今度ロケットで宇宙の方にも行ってくるわ。月でも行ってくるよかな」言つて。これ全部、地の理つなですね。でも、天というのは全部繋がって時空を超こえていますから。さっき私、例えば宇宙の果ての所に、和太かずた先生がおったらって言います。これ、地の理つなで言ったら、「おったら」に

なる。話しながら、本当はちょっと、そんなことないなあと思ひながら話しました。まあちょっと分かりやすいような例になったらと思ひて、お話ししました。

でも本当はね、天というのは、いわゆる肉体がどこにあるというのとは本当は違うもんですから。ですんぞ、「どこ」「どこ」という言葉が本当はな
いんですよ。「どこ」も何もないんです。全てが人で繋がってるわけですから、時空を超えますから。だからどこに行くわけでもないです。すべて隣にあるわけです、天というのはね。それは一つの大きな塊かたまりのようとも言える。まあこれ、どうしたってね、表現のしようが、もう理屈と申しますかね。地の理で、言葉で表現するしかありませんので、何とも言い

ようがない。本当、感覚の問題っちゃ、感覚の問題ですよね。

でもまあ、言い方としてはそうなってくる。だから、天の中のこの場所ということが、そもそもないわけです。天というのが一つなわけですよね。だから時間もなし、空間もないし、それを全部飛び越えるわけですから。こんだけ時間がかかる。天のあそこにおるから、こっちに來てくれるのに時間がかかる。いえ、そういうもんじゃないですよ。時間も空間もない。ただ、天という、まあそこに連なってある一つとして、この地の果てのところであると、今この地であろうと、全部そこは繋がってる。一つになってる。私がここで話をしたことは、天の果てでも宇宙の果てでも、今ここで、皆さんにお話ししてるのは目の前ですよね。

でも、宇宙の果て、何十億光年先のところであろうと、今ここで皆さんに話をしてるのんと、おんなじなんです。全部それ、伝わってるんです。これは天の働きではそうなってますよね。

ま、こういったことを考えると、どこに行くものでもないってのは、これほとんどですよね。だから御霊様はどこでもいる。こちらがお話をしたら、すぐそこにいる。御霊様も私たちに話そうと思ったらいつでも話是可以る。問題は、聞くことができるんか。これは生きてる人間次第でしょうねえ。だから、御霊様としたら、自分たちの声に耳を傾けようとしてくれる人のところはもう、大人気ですよ、人間としても。だからみんな寄ってくるんです。「いろんな人が、霊が来るんです」、たまに言い

ますよね。あれほんじですよ、うん。他の人は、なかなかその感覚はない、生きてても。でもたまに、そういうふうな感覚を持ってる人がある。天に対し開かれています。そうすると、「あ、この人分かってくれるかもしれない」って思ったら、集まってきましたよね。特にね、浮かばれん御霊ってというのが、やっぱり寄ってきますよね。祈って欲しいんですよ。自分の信心で助かるってことが、生きてる間にできなかつたもんですから、祈ってもらうよりほかないんですよ。で、御霊として孤独なんですよ。子孫に祈ってもらおうということもありませんから。だから浮かばれんです。だから、気づいてくれる人に祈ってもらいたいですよね。

だから、取り憑つくって言っても、ほんとはそんなつもりはないと思う

んです。「祈って、祈って」「言っつて、くっついでくるんですよね。でも、御霊様も生きてる人間と思ったらね、考えたらね、重いんですよ。重いからね、「もう嫌いな嫌いな、あっち行って」「ってなるから、だから余計に怒るんですよ。ただ助けて欲しいだけなのにね。祈って欲しいだけなのにね。この人やったら祈ってくれるかなと思って、すーっと近寄っても、「わー、もう来んといいて、やめといいて。ちよっとあっち行って、厄介やっかいやわ」ってなったら、被ひわれたらどないなるもんか。そらあ怒りますですよ。だからお被ひいといつのはしたらあかんのです、あれね。うん。お被ひいじゃなくてね、本当に祈ってあげたらいいんですよ。

もう少し話を進めていきますよ。ちよほどのみ教えの続きです。

この世で生きている間に、人に悪いことをしたり、天地の神様の機感（みかん）にかなわないことをしたりすると、死んでからでも、魂は神様のおとがめを受けるのである。御霊（みたま）を仏でまつっている者は、このような時、先行き（みさき）ができないと言ひ、神道でまつている者は、御先（みさき）になると言うのである。

〔理Ⅱ 佐藤光治郎 二八より抜粹〕

御先（みさき）っていうのはね、漢字で書いたら、御神米（ごしんまい）の「御」、御用（ごよう）の「御」

ですね。それに、先っちょの「先」ですね。これ、「御先になる」って言います。

御先というのはどういう意味かって言うと、これまた、ちよっと調べてみました。日本国語大辞典の解説ですね。これで、三つ目の理由、意味のところで、やっぱり柳田國男やなぎたくにおさんの言葉が出てきましたね。「変死した人の靈魂れいこん」って書いてます。変死。「人にとりついて引き込んだりすると信じられている。特に、西日本地方で言う。みさきがみ」って。柳田國男さんは『みさき神考しんこう』、神考ってというのはね、「神様考える」っていうことで、一九五五年に発表されてますけれども。そこでは、この方面で言うところのミサキは主しゅとして、人間の非業ひぎょうの死を遂げて、祀まつり手もないよ

うな凶魂きよしたた「って書いてますね。ちょっと聞いたことがない、見たこともない言葉ですけども。大吉とかさ、中吉とかね。凶とか大凶とかありますよね。その「凶」という字ですね。それに「魂」と書く。まあ、言葉からして見たこともない。けれども非常にまあ、恐ろしいという感じがしますね。人間の非業の死を遂とげて、祀り手もない。祀ってくれる人もいない。だからまあ、非常に孤独で、荒れていて、まあ魂としては非常に傷ついて、魂としては血だらけになっている、そんな感じですよね。そういうところを御先と言う。

で、一般的には変死した、変死ですからね。変わった死っていうことですけども、普通に寿命がきてお国替くにがえするというのはちょっと違

うんでしょう。変死した人の靈魂。人にとりついて引き込んだりすると信じられている。うん。こういうことでしょうね。教祖様も西日本ですもんね。

そういうふうにして考えておられて、「神道でまつっている者は御先になる」と言っているのである。「しませいね、なぜ、そないなるんですか。生きている間の所業しやごってこういうことになってくるんですね。いい、大事ですね。生きている間に、じゃあどうしたらいいのか。

先祖と、生きている者とは全部繋がっておりますから、良いことは良いことで、したことは、生きてる者からして、子孫にも伝わる。あるいはこれほんとはね、先祖にも伝わるんです。で、悪いことをしたら、どうな

るか。そうするとこれは、子孫にも行くし、先祖にも行きます。これ全部ほんとは繋がってるんです。だから先祖、先祖って言っても、先祖も生きてましたでしょう。生きてる間。じゃ、その時に、した所業というのが、行いっていろいろがある。いいことはいいことで伝わっていくし、悪いことは悪いことで伝わっていく。それがまあ言ったら、今、今現在生きてる、先祖がもう亡くなっても、その天地の間で積んだめぐりというもの、借金というもの、これが全部続いて、今の子孫にも伝わっている。これから伝わっていく、いいことも伝わっていく。自分に伝わっている。子孫にも伝わっていく、っていろいろいって来るんですね。

で、信心をせし頂くとどういふかは、良いものは人に、子孫に伝えたり、

先祖に伝えたり、返したり、悪いものを自分のとこで食い止めていくということ。これが、大事になってくるんですね。だから、生きてる時が大
事やうことをやうぱり、教祖様は仰るわけです。

先祖の罪を、生きてるもんとして何をしたらいいかって言ったら、先祖の罪を詫^わびて、そして先祖が浮かばれるということ。これを大事にして
おられましたね。近藤藤守への伝えの中では、
こんどうふじもり

先祖、先祖よりの罪をわびよ。めぐりは、ひなたに氷のご
とくお取り払い^{はらい}下さるぞ。

一理 I
近藤藤守 こんどうふじもり 二六一

また、違う人に対しては、

先祖代々からのご無礼があっても、うじこ氏子の食べる物の
はっほ初穂を供えてお断りを言えば許してやる。道の立たない
しりょう死霊でも、

〔理Ⅱ 藤井ふじいきよの 三より抜粋〕

死んだ霊ですね。死霊でも、これ御先みさきとういうことになって、御先にな
つてる御霊でしょ。

道の立たない死霊でも、願えば道を立ててやる。

【同】

ただ願うだけじゃなくって、先祖からのご無礼があつてお詫びを、お断りを申し上げてということ。その上で、道の立たない死霊でも、願つたら道を立ててやる。でもこれ、お詫びが先ということですよ。

何事も失態のないように成就するようにと、かねのかみ金乃神様に
すがればよい。

というふうにして、教祖様は仰ってますね。他にももう、めづりという
ことで、教典見たらいっぱい出てきますけれども、とにかくこう詫わびる
というんですよ。

で、教祖様自身も、ご自身はお詫わびをされましたね。四十二歳しじゅうにさいの大患たいかん
で。どうにもならなかったところを、治郎じろうさんに神様が入ってこられた。
で、ご無礼があったと。それじゃ教祖様はお詫わびをされましたね。お詫
びをされることによって、「其方そのほうは行き届とどいている」ということで、だか
ら助けてやることになりましたよ。

で、詫びるという話が、「いや、なんでや」と。「詫びるようなことはしてない」と。「いろいろ日柄や方角全部見たやないか」と。「一生懸命したやないか」と。「そんなご無礼なんてするはずがない」とっていうふうにして、言った義理のお父さんの古川八百蔵さんふるかわやおさうに対しては、「その方はもう心が間違つとる」と。で、「それで済んだなんて思つとるんか。ご無礼があったというふうにして、ちゃんと神様が言つとるんや。ご無礼を受けてる側が言ってるのに。じゃあ、方角だけ見たらそんでええんか」と。

「じゃ、それでもう、家が滅ほろんでもいいんやな。家の主人あぬじが死んでもいいんやな。お前はそう言うてるんやな」…いえいえちょっと待て、というふうになってくるわけですよ。

で、教祖様はお詫びをしっかりとされている。それどころか、もう「凡夫ほんぶで相わからず」。「もう凡夫で、至りませんのんで、どこでどこご無礼してるやら、めぐりを積んでるやら分かりません」ということを、お詫び申し上げます。さらには「これで済んだなんてちっとも思っておりません。もう、ただだももう、お詫びを申し上げますしかございません」って仰る。それで赦ゆるして頂いて、助けて頂いて。その信心があるから、ほんとに熱病で死ぬところを、のどけにまつりかえて頂いた。その、のどけだって、医者からしたら、「まつりかえて頂いて」って言うても、それでも医者が見たら九死に一生という、こういう状況だったんですね。だからお詫びをしたり、しっかり信心熱心じゃなかったら、とてもじゃないですけ

れど、教祖様は亡くなってたんでしよう。そうになったら、また家が滅んだんでしよう。そこを、お詫びを申し上げて、そして、先祖からの罪も含めて、自分が積んだめぐりも含めて、知らず知らずのご無礼お粗末不行き届きって、これが怖いんです。

「知ってのご無礼やったら、主人の命を取っていた」と言われましたよね、後々のところのちのちで。知らずのご無礼やから、主人だけは何とか守ってやることができました。罪がめぐっているもんだから、思うようには守ってやれない、ってこともありますね。守ってやりたくっても、罪がめぐっている間は、神も助けてあげることにはできないんです。天理てんりの抑えおさを受けていると。だから、生きてる人間がどうせんといかんのかっていう

のもこっから全部分かってきますよね。

「先祖の罪を詫びて」、罪を詫びるといふのは、この天地の間をめぐっているその罪が、赦されていくということ。そしたらどうなるんか。お詫びをすることによって、もう亡くなった先祖はお詫び、基本的にできないっちゃできないですよ。だって肉体がないもんですから、信心はできません。思いはあっても、信心はできません。生きてる間は信心ができます。だって肉体がありますから。だから、生きてる者が、祈ってあげるしかしょうがないんです。

先祖の罪を詫びるといふことによって、この天地の間をめぐっている罪が、許されるといふこと。そうすると、先祖も浮かばれるということ

になつてくる。いわば、なわ縄を解ほどいてもらふことになる。そしたら自分は、生きてる人間はどうか。先祖から自分にめぐっていた罪からもこちらも解放されるわけです。じゃあ、先祖も立ち行く。自分も立ち行く。子孫にも悪いものを残さずに、自分で守ることが、自分で断ち切ることができ。先祖も立ち行き、自分も立ち行き、子孫も立ち行き、神も助かっている。こうなつてくるわけですね。一じ、すぐく大事なところですね。

この世で生きている間に、人に悪いことをしたり、天地の神様のきかん機感（み心）にかなわないうことをしたりすると、死んでからでも、たましい魂は神様のおとがめを受けるのである。

る。

「理Ⅱ 佐藤光治郎 二八より抜粋」

「神様のおとがめ」って言いますけれども、これ、ざっとは言ってますが、本当に細かく言ったら、「神様がとがめてる」と言ったらちょっと違いますね。これ、天理てんりの抑えおさを受け取るんです。天で頭を打ってるんです。自らみずか、自分から、道から逸それてるということなんです。だから自分で、自分からですよ。

これは、神様はどうしようもできないことなんです。だって神様、こんなことしてくれなんて思ってなかったんですから。そないなるように

生きてくれと思って願ってだけれども、人間が我情我欲がじょうがよくで身勝手な生き方をするから。だからどうしようもないですよ。

神様は親やから許しても、天地てんちの道理どつりは許しませんよ。「なんてことしたんや」って言ってもね、親やったら「あんたアホか、バチン」で終わりますけれど、「じゃあないで、もうやったらあかんで」って言っても、そうは言っても、お上かみは許さんようなもんで、自分のした行いってというのは、天地の帳面にしっかり書かれていますから。したこと、思ったこと、考えたこと、心に浮かんだこと、心の中での暴言。全部ひっくりかえして、書いてるっちゃ書いてますよ。心で人を殺すってというのが一番、罪が重いととも言われるぐらいです。で、これ全部帳面に書かれています。

で、み教えの続きでいきますよ、

御み霊たまを仏でまつっている者は、このような時、先行みきが
できないと言いい、神道でまつっている者は、御み先さきになる
と言いうのである。

それゆえ、この世で悪いことはできない。天地の神様は
天と地とでじっと見ておられる。地におれば、天からじ
っと見ておられる。天てん知る、地ち知る、我われ知るといいうである
う。それが、天地の神様が知っておられるといいうこと
である。天は見通しであるからなあ。

当たり前ですけど、何回も、天というのは、全部、今皆さんが見えてるところにもう、目の前にあるわけです。自分の中に天が入ってるわけで、自分の目の前にも、天がずっと広がってるわけですよ。皆さんの中にも天があるし、この、目に見える全ての物質のところにも天があるし、天は切れ目がないですから。そこで天の神様がずっと見てる。

これ、「天知る、地知る、我知る」というであらう。「じじい、まあじじいで教祖様がね、この言葉を仰った。当時は皆、言われてたんでしょかね。

これ、「天知る、地知る、我知る、人知る」っていう、ま、中国のことわ

び、後漢書ごかんしょというところに出てきます。

ちょっと調べてみました。私、これだいが昔から調べてたんですよ。

「天知る、地知る、我知る、人知る」で、中国の後漢書というところから出てきましてね。で、ちょっと読んでみて、書き下し文、漢文ですよ。

「夜に至り、金十斤を懐ふくにし、以て震しんに遺あらんとす」「これね、中国の後漢ごかんという、まあこういう国があったわけですよ。で、楊震ようしんという人

がいたんですよ。楊震ようしんさんは非常にね、まあ、学者であり政治家であり、非常にこう、清廉潔白せいれんけつぱくな方かたやったんですよ。で、それに対して、密みつさんという人がいたんですよ。この人が、引き立ててもらったんですよ、

政治家として。で、楊震ようしんさんは、国に対してですかね、「この密みつさんはい

い人や」と。ま、言わば仕事ができるとか、そういうことなんでしよう。だから、推したんですよね。推薦すいせんした。で、それでこの人も、非常に位も上がったと。それで、感謝の気持ちというのものもあるし、もちろんそれだけじゃなくって、「これからもどうぞよろしくお願いしますねえ。そこんとこよろしく」といって、賄賂わいろを贈るってしたんですよね。

「夜に至り、金十斤を懐に持って、震、震というのは、楊震さんですね。楊震さんに、遺らんとする。夜になってね、お金を十斤、十斤がどんぐらいか分かりません。まあそれなりに多いんでしよう。で、懐にして、つまり人に見えんようにして。見えたらまあ、罰せられますからね。賄賂ですから。だから、いそいそと夜に来て。で、楊震さん、自分を推してく

れたということがあるんやから、お礼も含めて、「これからもうござよろしくお願ひしますね。よろしくお願ひしますよ。これから引き立てて下さいよ、ははは。お金渡しますから、そこんこよろしく」ってことばすよ。で、震さんに遺らんとする。

すると、「震曰く、『故人、君を知る、君、故人を知らざるは、何ぞや^{なん}』。これ、『あなた、私のこと知ってるよね。私がどいう人間か、知ってるよね。そんな君が、一体ななていじをしてるんや』と。そいつは、密曰く、『暮夜^{ほや}なれば知る者無し』。『夜も暮れて、もう真夜中やし、誰も見てないよ』と。だから、このお金、金十斤受け取ってよ』って言ったんです。

じゃあ、その「震ロハ」(1)で、「天知る、地知る、我知る、子知る」。子知るというのは、子というのは、子どもの子で「子」と言います。で、まあ、漢文で「子」というのは、「人」という意味なんですよ。ね。

ですんで、これがこのまま、日本ではじつわとして、「天知る、地知る、我知る、人知る」って出てくるんです。天と地と自分と人と、これで四つありますね。だからこれ、「四知」とも言います。四知というのとで四知とも言いますけれども、「天知る、地知る、我知る、子知る。何ぞ知るもの無し」と謂うや、「天の神が知っている、地の神が知っている、自分も知っているし、あなたも知っている。一体全体、これでもって、な

んで、どうして、知るもの無しと言っことが出来るんだろうか、ということと言ったと。で、「密愧はじて出いず」。で、それを、その言葉を聞いて、密さんは、恥ずかしくなって、もうその場から離れていったっていう、そういうふうなことなんです。

で、ここからまあ、日本にも伝わってたんでしようね。教祖様はご存じやったんでしよう。この後漢、楊震の伝えというものを、引用されたんですよね。「天知る、地知る、我知ると言うであろう」と。それが、天地の神様が知っておられるということである。天は見通しであるからなあ。だから、この世で悪いことはできない。天地の神様は、天と地とでじっと見ておられる。地の部分では、人の目はごまかすことができるよう

でも、天の神様は見てる。だって、天はもうここに全部ありふれてるわけで、そこに目の前にどこにでもあるわけ。どこ見ても、今、私、天を見てるんです。地を見てるようでも、どこ見ても天なんです、これ。重なってるわけですから。

そこに神様が全部見ておられるわけですから。自分の中も、自分の外も。地におれば、天からじっと見ておる。天というのは、高い所じゃない、今ここでじーっと見てるってことです。自分の心、自分の行い。

だからまあ、教祖様、何が言いたいか。人間ってというのは、私たち今生きてますけど、いつか死んで御霊になりますよね。死者になるわけです。だから、生きている間が大事だよ、ということ、教祖様は仰るんで

すね。で、悪いことはできませんな。と。だって天は地に重なってますから、溶け合ってますから。何しろ、「天知る、地知る、我知る、人知る」。これ、ことわざ調べたら、日本語訳みたいなんで言ったら、「やっぱり天の神が知っている、地の神が知っている、私も知っている。あなたも知っている。これでどうして知らないものが誰にも知らないなんて言えるんですか」っていうふうにしてなる。「天の神が知っている、地の神が知っている」って、やっぱりそういう表現になってましたね。

教祖様は、「天地の神様が知っておられるということである。天は見通しであるからなあ」。そらそうでしょうね。天は見通しですよ。地の部分であれば、私たちの肉眼、私たちの耳、これで見ようがないし、時間

も空間も制限がある。でも、天は関係ないですからね。天は見通しますよ。だから、天地の間に生きる人間として、正しい生き方を身に付けな
いと駄目だよってことを、教祖様仰ってるんです。それが、自分自身が
生きてる間に信心するしかない。死んでからじゃ、肉体がないから信心
できないんです。で、生きてる間が大事なんです。

生きてる間に、いいことは、周りにも波及する。先祖にも子孫にも。

悪いことも波及する。で、今もし苦しんでる、難儀がある、これはどうも
めくりやな、自分が積んだめぐりか、先祖が積んだめぐりか。知らず知
らずのご無礼、お粗末、不行き届き、いっぱいあるんでしょう。いや、自
分は何も悪いことしてない…いやいや、そういうことやから、難儀にな

るんです。教祖様ご覧なさいよ。済んだなんて思っておりません、凡夫ほんぶにて相分かりません、どこでどうご無礼してるや分かりません。ご無礼がないようにと思って、意識して意識して信心してきたけども、それで済んだなんてちっとも思いません。ここが違うんです。

めぐりで苦しんでるってことは、自分が積んだめぐりか、先祖が積んだめぐりか、そのめぐりが、天地の間を巡ってるんです。その巡ってる罪で、自分が苦しんでる、お咎めとがを受けてる。それを、赦ゆるしてもらっためにお詫わびをせんといかんし。で、お詫びをするだけじゃない、それ以上罪を犯さんようにせんとあきません。人に見えんから悪いこととして…いやいや、そうはいきません。天で見えます。天の神様が見えています。だ

から生きてる間、ほんとに、天地の間でしか生きることができないんですから。天でも地でも見てらっしゃるんですから。悪いことはできません。悪い心も持てません。お断りを申し上げながら、少しでも、神様の御心みこころにかなうような、生き方を求めてお稽古けいこしていきましよう。でないと、信心してる意味がありませんよ、ってことなんです。

で、信心させて頂いて、人間として、天地の間に生かされて生きていく人間として、正しいことを身につけて、正しい心を持って生きるようになるれば、先祖からの罪も、ひなたに置いた氷のごとくに、溶けて、なくなっていくということ。教祖様のように、あんなに深いめぐり、七つも墓を築かされるような、あんだけ深いめぐりでも、信心したら、深いめ

ぐりが高い徳に変えて頂けるといふこと。しっかり信心したら、先祖から巡っていた、自分に巡っていた罪も、自分が作って巡ってた罪も、それも解放される、赦される。先祖も立ち行き、自分も立ち行き、そうして初めて神様も助かっていくという、そういうことになるわけですね。

だから信心せんといかん。じゃあどうやって信心していくか。だから参っていかんといかん。参って、お取次とりつぎを頂く。金光大神様の御取次おんとりつぎ、み教えを頂く。口がある、耳がある、肉体がある、だから信心できるんです。だから、生きてる人間が必要だったんです、神様は。

お参りをして、お取次を頂く。そして、み教えをこうして、朝の教話でも聞かして頂く。聞かして頂いたことを心にかけて、心の中にしっかりと

と、首からかけるようなもんで心にかけて、それを意識して信心していけば、おかげは頂くことができます。

ま、それを、教祖様は仰ってるわけですね。死者と、生者と、切り離されてるわけじゃないんです。私たちはどうも、現代の生きる人間は、生きてる人間中心で物事を考え過ぎてるようですね。生きてる人間がすること、目に見えない天にも全部影響を及ぼします。天に住む、先祖に。これが生まれるかもしれない。

天、いる、御霊。おんなじことでもんね。繋がつなってるんですから。もう今は死んでしまって天にいる先祖も、その行いは、生きてる者に、巡ってくる。いいことも悪いことも。おんなじですよ。つまり作用し合っ

てるんです。この世とあの世を、もう往来が激しいんです。行き来が。ただ交流があるだけじゃない。行いも、所業も皆、しゆみ関わり合っんです。

今、生きてる私たちの地の部分とは全部天が重なって、御霊がみたまずっといるんです。どこに行くわけでもないんですよ。私たちの行いが、どうして天に影響しないなんて言えるんですか。そんなことあり得ないですよ。よう感じて下さい。人間ですから、神様の子ですから、分け御霊様頂わいてるんですから、しっかり使って下さい。そしたら、誰でもそれは感じ取れるはずなんですよね。それが感じ取れるだけでも信心は全然変わってきますよね。神様の声だってね、誰だってほんとは聞けるはずなんですよ。木と触れても、石と触れても、草と触れても、誰でもほんとはそ

いで会話ができるはずなんですよね。

ま、このようにして、教祖様のご信心を、大事になさったご信心を、また、死というものやら、亡くなった人、死者と、生きてる人間と、全部関わり合いながら、今を生きてるわけです。で、マラソンとおんなじでね、命を頂いて、「よーいドン」でスタートする。天から御霊、みたま地から肉体を頂いて、セッティングして、「よーいドン」でスタートして、そして今、生きてるわけです。旅に出てるわけです。航海に出てるわけです。冒険に出てるんです。その中でしっかりと学んでくれよと、信心しておかげ頂いてくれよ。

一人じゃ何をしでかすか分からんところがある。でも、神様に出会って、信心して、金光大神差し向けて頂いてる、まあ、皆さんにはね。だから、教えて頂いて話を聞いて助かるから、そうして本心の玉を磨みがいてくれよと、そういう旅にしてくれよ。で、ゴールの時には、死ぬ時にはまた戻もどってくる。スタート地点に戻ってくる。で、そんな時に、肉体は地に、たましいは、「さあ見してみ。お、よう磨こいてきたなあ、結構やなあ。出発した時はこんなやつだけ。いやあー、こんなになってよう磨こいたなあ、結構やったなあ」って、褒ほめてもらえるように、親様に。

「あんだけ手間暇てまひまかけておかげも授けたのに、お前どないしたんや、何をしとったんや」と。「信心することができるだけに必要なもの全部用

意したのに、お前何をしとったんやー!」って、叱しかられんように。がっかりされんように。

おかげを頂くために必要なものは、全部用意して頂いてるんですから。あとは信心、本人の心一つです。どういうめぐりがあるうとも、先祖からの罪を詫わび、自らのご無礼不行き届きを、罪を詫わび、そして改まりを願ねい、性根しやうねを入れ替え、信心の稽古をする。わが身わが一家を練習帳にしたら、誰だっておかげは頂けるんですから。そう約束して下さい。だから信心して、どうぞおかげを頂いていって下さい。それは先祖のためにも、先祖はみーんな、皆さんに声をかけてますよ、今だってね。私の話よう聞いてや、言いって。隣におっても、ずーっと話してるんちゃいま

すか。「あんた分かった？ちゃんと聞いてる？」言つて。聞いてますか、皆さん。聞いてあげて下さいよ。

そうやって、神様の声、御心みこころ、ご先祖からの思いも、聞かしてもらいながら、ご先祖は皆さんのために一生懸命働こうとして下さいますからね。こちら側もしっかりと信心して、先祖の罪をお詫びしながらでも、頂いてる徳もたくさんあるはずですから、それを、活かして頂いて。

そもそもね、こうして御神縁ごしんえんを頂いてるっていうこと自体がね、もう先祖だって必死ですよ。もう先祖からの限られた徳であろうと何だろうとね、めぐりがあっても、先祖の徳をかき集めてね、「もう、この子にー！」
と、たく託して、御神縁を下ささるとるんですから。この御神縁を頂いて

るっていうこと、これが何より、もう徳のあらいわ顕れですよ。その先祖から、もうほんとに必死のPATCHで、みんながね、寄ってたかって、で、徳をかき集めて、そして御神縁をやっとこうして下さってるのに、「どんな信心してるんですか」と言われんように。

しっかりと、亡くなった時に、「おお、結構やったなあ。おおー、磨いとるやないか。ああ、感心やなあ」って、親神様に喜んでもらえる、ご先祖様にも、みんなの徳を全部かき集めてあなたに御神縁を授けたから、帰ってきた時にね、「ああ、おかえり。よう来たなあ」言うて。「あんたがよう信心してくれたおかげでなあ、わしらもおかげ頂いた、ありがとう」言うて、言うてもらえるように。「もう、なけなしの徳をみんなでかき集

めて託して、御神縁授かったのに、はああ…」とかならんようにね。

御神縁を頂いてる、金光大神様のお取次み教えを頂いてるといふ時点で、もうそれだけでも違ふんですから、立場が。責任がありますよ、先祖に対して。神様に対してもあるんでしようけどね。金光大神様に対してもね。教えて頂いてるのじ…ってじです。だからほんと、信心して、おかげ頂いて下さいね。

はい。今日は今日で、神様から新しい一日を頂いております。今日も信心のドリルですから、信心の稽古けいこです。わが身わが一家を練習帳にして、信心の稽古けいこに励はげんで下さい。この身、この心を神様に向けて、信心す

るんです。

人間は神様の氏子、神様のおかげを身いっぱい受けるように、この身この心を神様に向けて信心せよ。何事も無礼と思わず一心に取りすがっていけば、おかげが受けられる。枯れ木にも花が咲くし、ない命もつないで頂ける。わが身におかげを受けて、難儀な人を助けてやるがよい。

〔理Ⅱ〕

福嶋儀兵衛ふくしまぎへえ

三より抜粋

この神様の御心をしっかりと頂いて、手元を大事に、信心みこころさして頂き
ましょう。とにかく、祈りを絶やさなことです。祈りを絶やさなくて
のは、もっただだ神様に「神様ー！」って言うだけじゃないませ。うん、そ
れはそれで、最初はいい。でも、ある程度信心が進んでったら、それより
も、神様の御心を、こちらがしっかりと、呑み込んでいくということ。先
祖からの思いも、きっちり呑み込んでいくということ、受け取っていく
ということ、しっかりと自分の中に刻んでいくということ。それがあっ
たら、皆、幸せになれるはずなんですからね。

神様が氏子かわいいっていうその心だけでもしっかりと受け取ったらい
いのに、あとは全部へっぴんぽんぽんきまますよね。先祖から「助けて」やら何や

らあるかもしれないよ。でも、先祖も、皆さんの生きてる者の幸せを願ってるしかたないです、基本的にはね。まあ、先祖は神様じゃないですから、「信心してくれよ。してくれたら自分たちも助かるし、あなたも助かるし、みんな立ち行くから神様も助かるから」って、その思いはあるでしょう。何より、徳をかき集めて御神縁ごしんえん下さっただけでもすごいことですよ。だからその責任もあります、ほんとうだね。

はい、いづつぞそれぞれ、今日も一日信心の稽古けいこに励はげんで下さい。よくお参りでした。

(一)



津田昇平教話 第七五話

令和三年三月十六日 朝の教話

令和四年四月二六日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
